

第三節 生活用水

「ブリタニカ国際大百科事典」は、沖永良部島のことについて、次のように述べている。

「沖永良部島（おきのえらぶ島）。鹿児島県奄美諸島の南西部にある低平な島。面積九十四平方キロメートル。古生層が基盤で、島の大部分はサンゴ礁。大山（二四六メートル）の周辺はドリーネが多く、カルスト地形が発達、海岸線の出入が少なく、良港がない。川は余多川だけで、水不足が深刻であったが、最近やや整備された。部落民は暗川（クラゴー）と呼ばれる鐘乳洞内の地下水を利用している。」

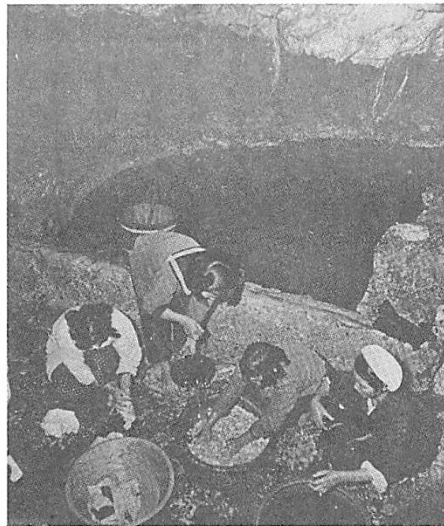
一 飲料水

沖永良部島の人々は、口癖のように「イラディイラバラヌ イラブ島」という、ごろの良い言葉を口にする。

「沖永良部島は、まれに見る理想郷である」という意味である。たしかに沖永良部島は、気候・風土に恵まれた長寿の島であり、まれに見る理想郷であるが、事典に指摘されているように、その水不足は、沖永良部島の最大欠陥であり、特に和泊町の水不足は深刻であった。

その昔私どもの先祖は、まず飲料水のある場所を探し求めて集落をつくったものと思われるが、人口の増加と文化の開発に伴って、水の需要は目を追って増大した。内城字などのように、割合に水が豊富で、どの家庭でも二〜三尋も掘れば清水がわき出るという恵まれた集落もあったが、大部分の集落では、危険な断崖絶壁のけもの道を二〜三十メートルも下りて、暗川の水を汲み上げたり、または海岸線のわき水を汲み上げて生活していた。

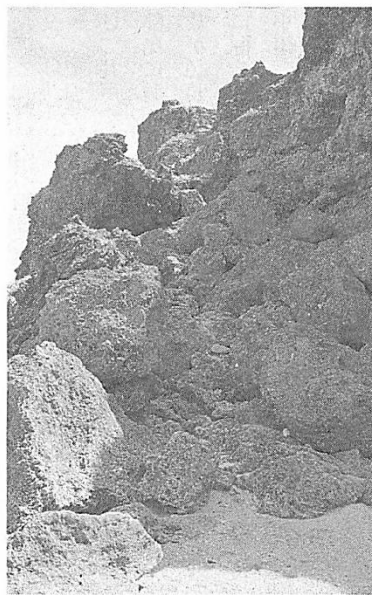
また水の湧出量の少ない集落では、先着順に水汲みの順番を決め、ちよろちよろわき出るわずかな水をためてから、小さなひしゃくで水を濁さないように気をつけながら、長時間かけて丁寧に汲みとったものである。なおそれでも足りずに、夜中過ぎ、水汲み人の少ない時刻を見計らって、ちようちゃんやカンテラまたは船ランプ等の薄暗い灯火を頼りに、水汲みに行ったものである。また



2 クラゴー
暗川の内部（国頭）（昭31・芳賀氏撮影）
暗川から飲料水を汲み、その下流で食料品を洗い、洗濯をしていた。



1 クラゴー
暗川からの水運び（昭31・芳賀氏撮影）
暗川の水をおけに汲み取り、それを頭上に乗せて、この急坂を上った。



3 哇布のワンジョ
海岸の泉の水をおけに汲み取り、頭上に乗せて4〜500mの坂道を運び上げた。

4 国頭のウシュウミ
海浜の泉の水をおけに汲み取り、頭上に乗せ、洗濯物を小わきに抱えてこの急坂を上った。

皆川字などでは、石橋川の水を浄化して飲んだり、飲料水に関する苦勞は言語に絶するものがあつた。

人口の増加とともに飲料水の需要はますます増大し、その水源を井戸に求めるようになった。和泊や手々知名などの集落では、その深さ十尋以内の井戸も相当あつたが、塩分を含んだ水の出る場合も多く、また塩分をあまり含まないにしても良質水とはいえない井戸が多かつた。上手々知名・出花・畦布・根折・瀬名・国頭等の集落では、十四〜五尋から三十尋近くも掘らなければ地下水線に達しない井戸が多く、中には三十尋を超す井戸もあつた。

井戸掘りはきわめて危険な仕事であり、また特殊技術が必要としたので、町内に数人しかいない専門職人を依頼して掘つたものである。まず良い飲料水の出そうな箇所を見定めて、直径一メートルないし一・五メートルほどの円形の土地を下へ下へと円筒状に掘り下げるのであるが、その途中には崩れやすい砂礫層があつたり、または硬い岩盤があつたりして、中にはダイナマイトを使って爆破した箇所もあつたそうである。また井戸壁の崩壊を防ぐために、その内側には石灰岩の切り石を積み重ね

たので、井戸の内側は石垣でできた円い筒になっていた。

このようにして、水欲しさのあまり難儀苦勞して命懸けで井戸を掘つたのであるが、井戸掘り工事は、沖永良部島における最難工事であり、そのためには多額の工事費が必要であつた。資力のある人が個人で自分の宅地内に掘ることもあつたが、中には三〜四十戸の戸数を持つ小組合で、その小組合員が協力して共同井戸を掘つた例も多い。海抜約五十メートルの上手々知名第一小組合では、小組合員が協力して共同井戸を掘つた。深さ二十一尋も掘り下げて工事は大正十二年に竣工したが、塩辛い水が出て長年にわたつて苦勞した小組合員たちをがっかりさせた例もある。

深い井戸から水を汲み上げるためには、丈夫な井戸綱が必要であつた。井戸綱の作り方は、まずわら縄をない、そのわら縄を数本練り合わせて直径三センチメートル、長さ三十尋ほどの丈夫な大綱を作つたものであるが、数人の男衆の一日掛かりの作業であつた。出来上がった井戸綱を井戸車に掛け、その両端に板釣瓶を結びつけて水を汲み上げたのであるが、太い井戸綱は水を含んで重く、二十〜三十尋もある深い井戸から水を汲み上げるのは、

たいへんな苦勞であつた。

上手に引き上げないと、井戸綱が揺れて釣瓶は井戸壁にあたり、水はこぼれ落ちて、手もとに届くときはひしやくの一二杯程度の水しか残っていないことが多かつた。また板釣瓶が乾燥している場合は、板の合わせ目から水がこぼれ落ちて、釣瓶が手もとに届くときは空っぽになるようなこともあつた。

そのようにしておけ一杯の水を汲み上げるのには相当な時間を要したので、先着順に順番を決めて水を汲むのが例であつた。また、深井戸の水汲みは大きな危険を伴い、釣瓶とともに子供が井戸底まで落ちたこともある。

このようにして、わき水にも井戸水にも恵まれない上手々知名などの字では、窮余の一策として、昭和十年ごろから自家用の飲料用水タンクを建造した。飲料用水タンクを建造するためには、まずその手始めとして、茅ぶきの屋根を瓦ぶきかトタンぶきにふき替える必要があつた。瓦ぶきやトタンぶきの屋根に落ちた雨水を全部雨どいに受け、その水を浄化水槽でろ過してから下の貯水槽にためておき、その水を飲料水その他に使用するという方法であつたが、それには多額の工事費を必要とし

たので当初あまり普及しなかった。

太平洋戦争の終戦直後沖永良部島を襲つた台風は、樹齢数十年の大きな松の木をへし折つたり、根こそぎ倒したりするような猛烈な台風であつた。そのため茅ぶき屋根の家は、その大部分が倒壊したり破壊されたりした。島民は台風銀座の沖永良部島に、高くて風当たりの強い茅ぶき屋根の家を建てることをやめて、低くて台風のときの風当たりが弱く、しかも何よりも大事な飲料水のとれる瓦ぶきかトタンぶき屋根の家を建てることを切望していた。

奄美大島の日本復帰後、トタンやセメントが手軽く入手できるようになったので、我先にと先を争つて茅ぶき屋根をトタンぶき屋根に改造した。また飲料水に困つていた上手々知名などの集落では、各戸先を争つて飲料水用の水タンクを建造し、ほとんどの家庭に飲料水用水タンクが普及した。

水汲み・水運びは、主として婦人の仕事であつた。

水汲みの場合には、まず頭にウチユクイを被り、杉板製の水おけとひしゃくとハシを持って水汲み場に行く。竹製やトタン製の太ひしゃくで水おけの九分どおり水を汲

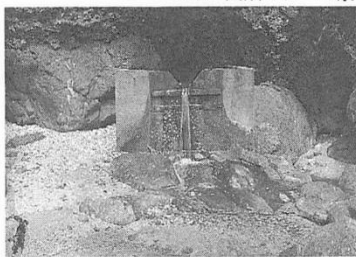
▼11 国頭のタバ

海岸の泉の水をおけに汲み取り、それを頭上にのせ、洗濯物を小わきに抱えてこの急坂を上った。

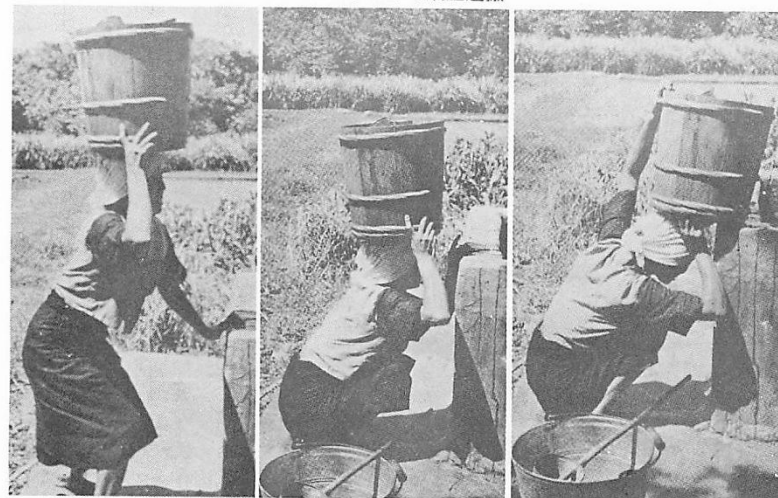


▲9 和泊の石川 イシガハ 満潮になると海水に没する。

▼10 国頭のタバの泉



5～8 水おけの頭上運搬



7 静かに立ち上がる。

6 腰をすえて重心をとる。

5 井戸杵に倚って、水おけを頭にのせる。

(昭31・永井氏西原で撮影)

れも助勢人がいない場合は、水おけの半分くらいの水を汲み入れてから、一人で水おけを抱えてヌケ石（井戸の場合は井戸杵）の上に載せ、ひしゃくで水を汲んで行って、水おけの九分どおりまで入れる。次にヌケ石の前にひざを折ってかがみ、両手で水おけを少しずつずらして頭上に載せる。片手で重たい水おけを支え、片手でヌケ石を支えて、やおら腰を伸ばし、ひざを伸ばして立ち上がったものである。

水汲み、水運びのことでいちばん大事なことは、杉板製の水おけを乾燥させないことである。乾燥させないために、水汲みおけは絶対に日光の当たらない場所に保管したものであるが、それでも高温な沖永良部島のこと、つい乾燥させてしまうことが多かった。乾燥すると水おけのたがが緩み、その底や周りの杉板の合わせ目から水がしたたる。片手で水おけを支え、片手でしたり落ちる水をはらいながら運んだものであるが、それでも家に帰り着くまでにはすっかりずぶぬれになるようなことが多かった。

大正中期ごろから、水汲み、水運び用として、だんだんバケツが使用されるようになった。天びん棒の両端に

み入れる。運搬の途中で水おけの水を一滴たりともこぼさないために、水汲み場付近にある竹の枝葉や蘇鉄葉などを折り取ってきれいに洗ってから、ひしゃくとともに水おけに浮かべる。

水汲み場にだれか助勢人がいるときは、頭に被ったウチウイの上にハシを載せ、その上に自分の水おけを載せてもらう。頭や首を前後左右に動かさないように気をつけながら自宅へ運び、だれか助勢人の力を借りて水おけを下ろしてもらい、飲料水用の水かめに入れて大事に保管し、少しずつ使用したものである。

また水汲み場に自分以外にだれも助勢人がいないときのために、どの水汲み場にも高さ一メートルほどの立石を丈夫に固定したヌケ石という物が設置されていた。だ



8 家に帰り、助勢人の手を借りて水おけをおろす。

小さなバケツを釣り下げて、水汲み・水運びに子供たちも一役買うようになったが、暗川や海岸の泉など、断がいや急坂の多い島のこと、水汲み場の地形にに応じておけとバケツが併用されていた。

(注) ① 飲料用水タンクの建造費 上手々知名字で最初に建造された菅村トヨ氏宅の場合、水タンクだけで当

時(昭和十年)の百九十円であった。

② ウチユクイ 芭蕉布など、手織りの反物を七センチメートルほどの長さに切り、二つ継ぎ合わせてふろしき大にしたもの。

③ ハシ(おけ座) わらを円型に編み、頭上に載せて、水おけなどの座りをよくしたもの。



14 バケツによる水運び
(昭31・芳賀日出男氏撮影)



12 上手々知名のユヌビンジョウ
ヌケ石と田いも



13 飲料水タンク(上手々知名・菅村トヨ氏宅)

15 堀井戸(西原)
(昭31・芳賀日出男氏撮影)

